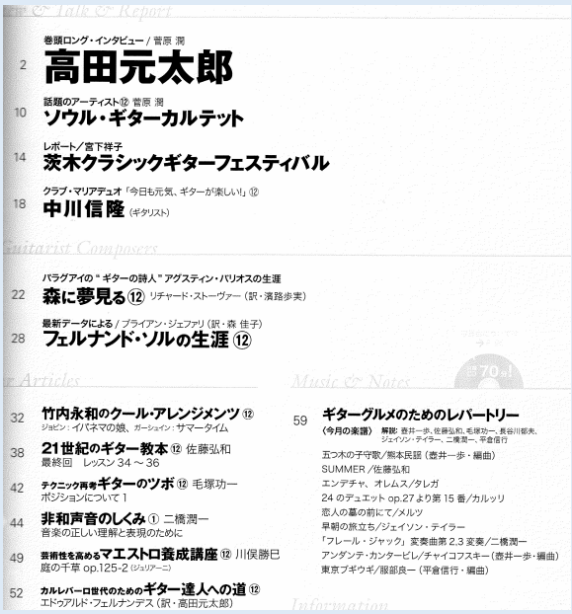
Guitar dream　NO.12(2008. 8)の紹介　by yakateru

表紙



メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　高田元太郎

ウルグアイのギタリスト、カルレバーロの「カルレバーロ奏法」を直接伝授されたギタリストということで、日本で活躍されたギタリストです。ただ活動は、ソロよりバンドネオンデュエットやタンゴメンバーとの演奏会が多いようです。また、フェルナンデスの「ギター達人の道」シリーズの翻訳もされています。

- アランフェス協奏曲を弾くうえでの秘訣は、この曲は楽譜通りに弾くとあまり効果的でないので、音を変えています。これは、どのギタリストもやっていることですが。(yakateru:そうなんだ！)
- カルレバーロは、とても生徒をのせるのがうまかったですね。罪がないというか、無邪気な方でしたね。純粋無垢な可愛いおじいちゃんのような感じでした。ただ、彼は、コンサートの前になるとすごくナーバスになる人でした。
- フェルナンデスは、学者タイプの人で、バロック音楽を演奏する時には、ロバート・ドニントンの本を渡され、まずこれを読んでからだと言われました。一方、ピエッリは芸術家タイプで、よい音の出し方や聴衆を魅了する演奏、つまり華の部分を学びました。
- 南米にいたときはギター三昧でしたが、日本に帰ってきてからはギターをやろうという気にならなくて、家業の不動産業を手伝い宅建の資格も取りました。
- カルレバーロのギター教則本は、どのような考えでテクニックや曲を学んでいけばいいかの方法論を書いたもので、その通りにやれというものではありません。ギターの奏法を体系的にしたのだと考えています。その意味で「カルレバーロ奏法」という呼称には語弊があると思います。
- 「カルレバーロのギター演奏法の原理」に「アポヤンドはいらない」と攻撃的なこと書いてありますが、あれは若気の至り的なところがあり、彼は、アポヤンドも使っていました。ただ、「アポヤンド奏法」という名前が嫌いだったのだと思います。

【クラブ・マリアデュオのインタビュー：中川信隆】

スペインに渡りイエペスの師事を受けたギタリストの一人です。

- ■ 当時はギターブームで、労音でギター教室の生徒募集をかけたら、たったの 5 分間で 50 名が集まりました。ただ、次の月には半分に減り、また 1 か月後にはその半分に減りと、そんな感じでした。
- ■ イエペス先生は、あまり叱らない人でしたし、良くても褒めない。いろんな考え方を教えてもらいまし

た。手で足りなければ鼻で弾けとか、足で弾けとか。既成概念にこだわるなということです。

- ギターの怖いところは、ヴァイオリンやピアノでは、ミスしても素人にはあまりわからないが、ギターではミスするとすぐにわかる。音が多少ビビるだけでもばれる。怖い楽器です。

【その他の注目すべき記事】

- 「21 世紀のギター教本：佐藤弘和」：基礎からもう一度やり直そうと考えている人向けの教本。12 回目は、総合編でジュリアーニの「アマリリス変奏曲」を題材に開設しています。
- 「マエストロ養成講座　第 12 回」ジュリアーニの「庭の千草」。テーマと二つの変奏とコーダからなる曲です。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：ボサノバの代表曲「イパネマの娘」、ガーシュインの「サマータイム」のソロアレンジが掲載されている。
- 「ギターのツボ：毛塚功一」：第 12 回は、ポジション移動について解説しています。

その他、「非和声音のしくみ：二橋潤一」、「ソール・ギターカルテット」紹介、「フェルナンデスのギター達人への道（第 12 回）」等もあります。
また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下記の楽曲が掲載されている。

ギターグルメのためのレパートリー

フランシスコ・タレガ

エンデチャ、オレムス

エンデチャ（Endecha）は哀歌または挽歌を意味し、葬式や追悼の際に演奏される曲。7 音節の 4 行詩で歌われるのが本来の姿で、タレガのこの曲も7音による4フレーズが印象的です。オレムス（Oremus）はラテン語で「われら祈らん」の意味。最晩年のコンサート活動の途中に立ち寄った教会で、信徒たちの歌や祈りに耳を傾けるうちに作った曲と言われていましたが、実はシューマンの《幻想的舞曲 op.124-5》の編曲。その2週間後にタレガはこの世を去り、彼の遺作となりました。（毛塚功一）

ヨーゼフ・カスパル・メルツ

恋人の墓の前にて

《挽歌（哀悼の歌）》の第 1 曲。メルツのテルツギター（短 3 度高い調弦）による一連の作品の 1 つです。通常のギターでは 3 カポになりますが、ハイポジションが少々大変かもしれません。曲はメルツのソロ曲集《吟遊詩人の歌》の雰囲気にも通じるロマンティックなもので、ソルやジュリアーニの曲ではなかなか味わえない良さがあります。1～8までの主部は「嘆き」、9～10の中間は弔いの鐘が聞こえ、静かで穏やかな「悲しみ」が歌われます。悲しみを長調で表現するのは西洋の特徴。11で主部が再現した後、12からはコーダ。再び鐘の音が聞こえ、感極まり、13で♂になります。ソルの《悲歌風幻想曲》では「シャ-ロット！　アデュー！」の部分ですね。（佐藤弘和）

二橋潤一

「フレール・ジャック」変奏曲第 2、3 変奏

変奏2は主題開始部分のモティーフを主に展開したものです。変奏3は静かな歌をイメージしました。（二橋潤一）

ジェイソン・テイラー

早朝の旅立ち（Getting Here より）

《Getting Here》は野村芳生の委嘱により作曲され、作曲者自身と野村によって 2007 年 4 月 29 日名古屋ヤマノホールで初演されている。この作品は、ウィリアム・ギブソンの小説「パターン認識」で知った、肉体と魂とのズレという考えにもとづいている。つまり、魂は時速 100 キロほどでしか移動できないので、肉体が 100 キロ以上のスピードで移動するとついて行けない、というものである。だから肉体が目的地に到着したとしても、魂が追いつくにはさらに 2,3 日を要するのである。私はこの考えを気に入り、自分の魂が日本へ到着するまでのさまざまな冒険を空想した。孤独な早朝の旅立ち、数々の荒波と神話上の生物の目撃、雲の中での部族の踊り、そして日本への到着とサクラ吹雪、最後は、魂と肉体の再結合の祝賀会…。（ジェイソン・テイラー）

熊本民謡（壺井一歩・編曲）

五つ木の子守歌

下降音型に彩られた《五つ木の子守歌》。

霧の中にあるようなイメージだろうか。練習番号2からは少し雰囲気を変えて。練習番号3のところで、ようやく一条の光が射す。とびっきりの、両手のひらで受け止めたくなるような、何かを降らせ。（壺井一歩）

佐藤弘和

SUMMER

シンプルな「夏」を表現しました。最初に聞こえてくるのはお馴染みの 3＋3＋2 のリズム。夏の足音。ストロークで盛り上がってきたところで、意気揚々とテーマが登場。細かなアルペジオは一粒一粒、存在感があるように。ハイポジションのストロークの後クライマックス。エネルギーの爆発です。中間部は清涼感のある風が吹き抜けるといった感じでしょうか。全体的に常にアクセントを利かせた躍動感のある演奏を心がけてください。何となく「原型」といった感じのスコアなので、自分なりのアドリブを入れるくらいだと嬉もしいですね！ 杜の都仙台で活躍中の愛弟子、小関佳宏君に献呈。（佐藤弘和）

フェルディナンド・カルッリ

24 のデュエットより（ギター教則本 op.27 より）

曲集も後半にさしかかって曲が長くなってきました。この第 15 番は最初こそハ長調らしい明快な曲調ですが、その後転調を繰り返しｂ 3 つの変ホ長調まで出てきます。技術的には、さまざまな調で何度も出てくる 16 分音符下降スケールを鮮やかにきめていくことが練習のテーマになるでしょうが、調によって変わるスケールの 1 つ 1 つの色合いや、それらのつながりで描かれるドラマチックな音楽の気分を理解することもさらに大切です。22からの 4 小節はディレイ効果とも言えそうな面白い音使いですね。どちらのパートとも、3 つの音グループの頭にほんの軽いアクセントをつけると雰囲気がよく出るでしょう。（長谷川都夫）

ピョートル・チャイコフスキー（壺井一歩・編曲）

アンダンテ・カンタービレ

チャイコフスキー《弦楽 4 重奏曲第 1 番》から第 2 楽章。《アンダンテ・カンタービレ》としてこの楽章のみ単独で演奏されることも多い人気曲です。原曲が弦楽 4 重奏なので、ギター 4 重奏へのアレンジといっても大きな変更はしていません。大変シンプルな曲だけに、魅力的な演奏をするのはかえって難しいとも思いますが、ノーブルな表現の中にときおりのぞく感情の発露、といったあたりがこの曲には似合っているのではないかと想像します。（壺井一歩）

服部良一（平倉信行・編曲）

東京ブギウギ

タイトルに「ブギウギ」とついているものの本来のブギウギとは少しリズムが違います。「～ブルース」がブルースではないように、昭和歌謡にはよくあったようです。

明るくノリのよい雰囲気を作るように演奏しましょう。ベースはほとんどピチカートで弾きますが、手のひらを弦に当てる位置を調整して音量の変化や鋭さを出してください。5のcho.はチョーキング奏法です。弦を押さえながら、押し上げて音程を変えます。ここでは半音上がるようにずらします。次の cho.D はチョーキング・ダウンです。ずらした弦を元に戻します。（平倉信行）